

も居ぬのが幸ひ、ひよつとしたら此の金子は天から私に授かつたのか解らん、人が見たら蛙になれよ……」

と番頭が、其の金子を獨言を云ふて懷中へ入れました。誰も聞いて居る者が無いと思ふて居ると、此の家の表の荒格子に凭れて番頭の云ふて居る事を聞いて居りましたのが、櫓濱の上荷さしの船頭、此の櫓濱と申しますのは、久寶寺町の東横堀に櫓があつて、此處を櫓濱と申したそうで、此の船頭の名前を幸兵衛と申します、下駄の鼻緒が切れましたので直して居りましたが、

「ハテナ、悪い奴ぢやなア……」

と心の中で思ふて居ります。處へ右の親爺さん、松屋町まで出まして何か買物を仕様と、懷の中へ手を入れましたが金子が無いので、サア吃驚り仕まして、今まで飲んでいた酒の酔は醒めて、顔は蒼褪めて、以前の酒屋へ取つて返しました。

「モシ……オ、番頭さんで御座りますか、卒爾ながら此處へさして只今金子二十五兩落して歸りましたが、落ちて御座りまへんだかしらん」

「イヤ、何も落ちて御座りまへんで」

「イ、エ、屹度落ちて居る筈で御座ります」

「落ちてある物なら探して見なされ、商賣人の店先で物が失なつたと云はれては私處が濟みまへん」

「そんな事を云はずに出しておくんなはれ」

「親爺さん、貴方私處を出しなに餘程酔ふて居てやつたが、若し途中で落したのを私處と思ひ違ひをしてるのと違ふか、云ふ事にことかへて疎勿な事を云ふてやと私が困るがな、屹度落したに違ひがないなら、何故店先に無いのんぢや」

「サアそれが無いので御座ります、モシあの金子が無かつたら、起つても居ても居られまへん、私は婆の病氣で娘を賣つて新町の判人から受取りました二十五兩、何卒拾ふたら返して下さりませ」

「これはどうも迷惑な、貴方拾ふたら返してくれと云ひなさるが、私はそんな事は知りまへん、チャツと歸になされ阿呆らしい、何を愚圖々々仕て居るのぢや、チャツと歸れ」

「ア、御免、オイ番頭さん、貴方拾ふてなさる、返してやりなされ」

「何を返しますのぢや」

「オイ番頭はん悪いぜ、お前が最前拾ふた金子を此處へ出し」

「拾ふた金子とは何んぢや」

「オイ呆化るない、此處へお親爺さんが酒を飲みに来て、酔ふて歸つた跡でお前獨言を云ふたやないか、人が見たら蛙になれと懷ろへ入れた金子をば出してやれ」

「フ、ン、イヤ之は解つた、お前はん騙りぢやな、物取りぢやなア」